

22) 11才女兒に発生した卵管茎捻転の1例

新田 幸壽 (長岡赤十字病院
小児外科)
小野 一之・土屋 嘉昭
田島 健三・和田 寛治 (同 外科)
鳥越 克巳 (同 小児科)
須藤 寛人 (同 産婦人科)

卵管茎捻転が、初潮前の女兒に発生することは極めて稀とされている。

われわれは、最近11才女兒に発症した本症を経験したので報告する。

症例は、11才女兒で左下腹部痛と嘔吐を主訴に来院し小児科入院となった。腹部エコーでは、子宮・卵巣に異常認めなかったが骨盤腔に液体の貯溜を認めた。入院後腹痛は次第に増強し間欠的となり、腹膜炎症状も出現してきたため開腹した。

下腹部横切開で開腹すると、骨盤腔を中心に血性腹水約 200ml を認め、子宮に接し鶏卵大の暗紫色の腫瘤を認めた。左卵巣、子宮、右付属器は正常に存在し、腫瘤は左卵管にあり、卵管単独の茎捻転(270度捻転)によるものであった。卵管は hemosalpinx の状態で完全に壊死に陥っており、捻転解除後も血行障害の改善が認められなかった。手術は、卵巣を温存し卵管切除を行なった。

術後経過は順調で、第10病日に退院した。

23) 術前に先天性回腸閉鎖症と鑑別困難だった Meconium Disease と思われる1例

内藤 真一 (新潟市民病院
小児外科)
若佐 理・丸田 宥吉
藍沢 修・桑山 哲治
齊藤 英樹・山本 睦生 (同 第一外科)
小田 良彦・山崎 明 (同 小児科)

新生児期に腸閉塞症状を呈する疾患には、腸閉鎖(狭窄)症、Hirschsprung 病などがあり、大部分は術前にその経過、腹部単純写真、注腸造影所見などにより診断可能とされているが、今回、われわれは、術前には回腸閉鎖症と診断し、術中には全結腸無神経症と誤診した Meconium Disease と思われる1例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

症例は30週4日、1270g で出生した双胎の第二子の男児。胎便排泄遅延があり、腹部膨満、経鼻胃管からの胆汁の逆流がみられ、腹部単純写真でニボーを認めたため、生後5日目に注腸造影を行ったところ、microcolon の所見であった。回腸閉鎖症の術前診断で開腹したとこ

ろ、腸閉鎖はみられず、回腸に caliber change を認め、全結腸無神経症を疑って回腸瘻造設を行った。狭窄部分の生検では神経節細胞陽性で、その後の直腸内圧測定でも直腸肛門反射は陽性で、生後143日目に回腸瘻閉鎖を行って経過順調で退院した。

24) 当院における海洋動物による傷害

小林 英司(町立相川病院外科)
吉田 英春(同 内科)
小林 誠悟(同 産婦人科)

当院は佐渡郡相川町に位置し海水浴を中心とする夏の観光地である。病院は日本海側に面し若い医師にとって思わぬ海洋の動物による傷害を経験することがあった。

海岸で遊んでいる際の岩についている貝殻で手・足を切る者やウニのトゲを刺した者などは創部の観察を十分に異物の残存に注意しなければならない。

また海辺での皮膚疾患の中には、白ガヤによるジンマン様の皮膚炎やウミブドと呼ばれる小型昆虫による刺症があった。

食用物としては、オコゼのヒレにふくまれている毒物の刺症やなまイカなどによるアニサキス胃炎さらに魚骨の異物などがみられた。

いずれの症例も小外科的のものであり軽視されがちであるが、経験の少ない若い医師にとっては当初困惑するものであり、ここに報告した。

25) 当科における中心静脈カテーテル敗血症の予防対策

川合 千尋・加藤 知邦(日本歯科大学)
遠藤 和彦・松木 久(新潟歯学部外科)

1986年6月から1989年3月までに、当科でIVHを施行した症例数は133例で161本の中心静脈カテーテルが挿入されている。カテーテル敗血症一抜去により解熱したものの頻度は133例中10例(7.5%)、カテーテル数161本中13本(8.1%)であり、先端培養陽性率は、検査本数131本中10本(7.6%)であった。

カテーテル敗血症の予防対策として、①抗血栓性の良好なカテーテルの選択、②三方活栓、接続部のない一体化輸液ラインの使用、③輸液製剤の薬剤科クリーンベンチでの無菌的調製、④医師、薬剤師、看護婦、栄養士、検査技師からなる栄養管理チーム(NST: Nutritional Support Team)による管理などを行いカテーテル先端培養陽性率の有意の低下を認めている。またNSTでは、週1回の回診、月1回の勉強会などを